P-3 追随的疑問における伴立:「それも」の談話構造的分析*

大久保 弥 (東京外国語大学)
okubo.wataru.m0@tufs.ac.jp

要旨

本稿では、接続詞ソレモを対象に、談話構造の観点からその認可の条件を議論する。ソレモは、直前の主張に関する付加詞の導入、またはその主張で不定名詞句により導入された個体を措定・同定する用法を持ち、どちらの用法も談話の先行性と事象の同一性という性質を含むと指摘する。これらの性質について、談話に疑問–答えの対を想定する Question Under Discussion(QUD; Roberts 2012) の枠組みから分析し、ソレモ節は、直前の主張に追随し、その主張を伴立する疑問に答える際の標識であると提案する。さらに、提案の分析から、累加標識「も」との談話構造的性質の違いを明らかにする。最後に、他言語での関連する表現の分析 (Onea & Volodina 2011, a.o.) を参考に、ソレモの構成的分析の可能性と、ソレモと指定標識・同格表現との関係性を示す。

[キーワード*:* 日本語、形式意味論、語用論、Question Under Discussion、接続詞、それも]

構成　本稿の構成は次の通りである: § 1では、本稿で扱うソレモの付加詞導入と措定・同定の用法を指摘する。§ 2では、両方の用法に見られる談話構造的制約を指摘する。§ 3では、QUD の枠組みから分析し、ソレモの認可の条件を提案する。さらに、累加標識の意味論と比較する。§ 4では、通言語的観点から構成的分析の可能性と、指定標識・同格表現との関係性を見る。§ 5では、議論をまとめる。

1　「それも」の用法

ソレモは、隣り合う節同士の関係性を伝える接続表現の性質を持ちながら、他の接続詞に比べ研究が少なく、その性質は明らかでないところが多い。一般的に、ソレモは「前に述べた事柄について補足の説明を与える」(『大辞林』)、「程度がはなはだしいことを後から付け加えて限定する [...]。前文の内容を後から付け加える事柄によって限定する [...]」、「話者の驚きや意外、慨嘆などの暗示がこもる」(飛田・浅田 1994:249) と説明される。沼田 (2009:104–111) は、(逆接) 添加の接続詞として見做している。伊藤 (2010) は、他のソ系指示詞を含む接続詞との比較から、ソレモは文法化を経て接続表現としての用法を持つに至ったと主張している。

以下では、ソレモに付加詞導入と措定・同定の用法を認める。管見の限りでは、これらの用法の分類は、本稿で初めて指摘するものである。

1.1　付加詞導入

ソレモは、直前の主張の事象に関する要素を導入することができる (1–2)。ソレモ節[1] で標示されるものには、事象が起こる場所・時間等を伝える付加詞に加え、非必須項、様態・程度などを伝える副詞節等が含まれる[2] 。

*本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」の研究成果の一部である。NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese) からの例文は、その出典を「(NPCMJ: ID)」と示す。本稿執筆に当たってご指導いただいた野元裕樹准教授、ヒンディー語・インド英語データにご協力いただいたプラシャント・パルデシ教授、ペルシア語データにご協力いただいた Sarah Saeidi Vernosfaderani 博士に感謝したい。本稿に含まれうる全ての誤りは筆者の責任である。

[1]本稿では、ソレモで標示される節を総称してソレモ節と呼ぶ。ソレモには、本稿で議論する用法に加え、累加の用法がある。この用法では、「それ」が現場指示的な場合 (e.g.,「**それ** (= 指で示されたもの) **も**買います。」) あるいは「それ」が談話内で導入された節・指示対象を照応する場合 (e.g.,「だれも名を知らず、どういう素性の老人なのか、**それ** (= どういう素性の老人なのか) **も**まるっきりわからない。(NPCMJ: 169_aozora_Hisao-1939;JP)」) がある。ソレモと累加との比較は、§ 3.3で議論する。

[2]必須項の標示は、付加詞に比べて容認度が低いため、本稿では議論の対象としない。ただし、明示的な対比表現を伴う場合 (ia) や、遊離数量詞が先行する場合 (ib) などで容認度が上がることから、必須項はソレモ節と原理的に不適合なのではなく、意外性の読みや情報構造的な要因が容認判断に影響すると考えられる。

(i)　a.　彼は買った。**それも** {?? レコードを / CD でなくレコードを}。
　　b.　彼は 3 枚買った。**それも**レコードを。

(1) 彼はレコードを買った。**それも** {早稲田で / 6 月に / 急ぎながら / 片手で持てないくらい}$_{\textbf{付加詞}}$(買った)。

ソレモ節は先行節の項と同一指標の *pro* を持ちうる (2a)。また、文副詞は対象にできない (2b)[3] 。

(2) a. 彼 $_i$ はレコードを買った。**それも** pro_i {自分自身 $_i$ / 自分 $_i$ の彼女}(のため) に $_{\textbf{付加詞}}$(買った)。

b. 彼はレコードを買った。**それも** {* 恐らく $_{\textbf{モダリティ副詞}}$ / * 幸運なことに $_{\textbf{話者指向副詞}}$}(買った)。

1.2 措定・同定

ソレモ節は、先行節で不定名詞句により導入された個体について、措定・同定する用法を持つ (3)[4] 。ただし、定名詞句を先行詞に取ることができない (4)[5] 。

(3) a. 彼はレコードを買った。**それも** 60 年代の {レコード / Ø/ もの / やつ} を $_{\textbf{措定}}$(買った)。

b. 彼はレコードを買った。**それも** {『ペット・サウンズ』/ ビーチ・ボーイズの最高傑作} を $_{\textbf{同定}}$(買った)。

(4) 彼は {この / その / あの / この店で一番高い} レコードを買った。

{# **それも** / すなわち / つまり} {60 年代の (レコード) を $_{\textbf{措定}}$ / 『ペット・サウンズ』を $_{\textbf{同定}}$}(買った)。

ソレモ節の述語は先行節の述語と同一でなければならず、コピュラを用いた措定・同定はできない (5)。

(5) a. 彼はレコードを買った。{# **それも** / それは}60 年代のレコードだった $_{\textbf{措定}}$。

b. 彼はレコードを買った。{# **それも** / それは}『ペット・サウンズ』だった $_{\textbf{同定}}$。

2 談話構造的制約

上記の用法に共通して見られる特徴として、**談話の先行性**と**事象の同一性**という二つの性質を指摘できる。

2.1 談話の先行性

ソレモ節は、先行節として取る対象が必ず直前の主張に限定されるという談話の先行性の制約を持つ。ソレモ節が認可されるのは、対象の主張に追随するか、挿入句的に与えられる場合である (6)[6] 。

(6) a. 彼はレコードを、**それも** {60 年代の (レコード) を $_{\textbf{措定}}$ / 『ペット・サウンズ』を $_{\textbf{同定}}$} 買った。

b. 彼女は銀座の、**それも**一流の店でばかり買い物をする。

(NPCMJ: 379_textbook_djg_intermediate;page_425;JP)

ソレモ節は、主張に先行することができない (7a)。また、直前でない主張 (=「彼がレコードを買った」) は、ソレモ節の先行節として解釈されない (7b)。

(7) a. # **それも** {早稲田で / 60 年代のを}(買った)。彼はレコードを買った。

b. 彼はレコードを買った。そして映画を見た。**それも** {早稲田で / 60 年代のを}({見た / # 買った})。

ただし、「どちらも」のような量化表現があれば、先行する複数の主張、個体を対象に取ることができる (8)。

(8) 彼はレコードを買った。そして映画を見た。**それも**どちらも {早稲田で / 60 年代のを}。

先行節は、談話で与えられた主張に限られる。そのため、「の」を伴う確認の疑問や、驚きのために発話を復唱する疑問 (「?!」で示す) の場合には容認されるが、純粋な疑問 (i.e.,「か」) に追随する場合は容認されない (9)。

---

[3] これらの性質は、§ 4.1で触れる、付加詞を導入する 'and that' 構文でも見られる (Lødrup & Haff 2011)。

[4] 一般的に、コピュラ文では、主語と述語の表現の性質によって、主語について叙述する措定 (predication)・典型的に代名詞または指示詞を含む主語を取り同一性を示す同定 (identification)・非飽和名詞句を含む主語を取り同一性を示す指定 (specification) の区別がされる (Mikkelsen 2011)。本稿でのソレモ節による措定・同定とは、(ii) で示される意味が得られることを指す。基本的に、ソレモ節の主語は不変的に先行節の主語と同一指標の *pro* であるため、ここでの同定とは、純粋に意味の側面だけに関わるものである。

(ii) a. 措定: 個体について、その属性を示す (叙述する)。$\lambda P.\lambda x.[P(x)]$

b. 同定: 個体について、その同一性を示す。$\lambda x.\lambda y.[y = x]$

[5] 定名詞句を先行詞として措定・同定するスナワチ・ツマリといった標識とソレモの違いは§ 4.2で触れる。

[6] この先行性の制約は、同格表現などの規約的含意 (Potts 2005) と結びつく現象にも見られる。ソレモとの関係性は、§ 4.3で触れる。

(9)　レコードを買った {の? / ?! / # か?} **それも**早稲田で？

2.2　事象の同一性

直前の主張の事象と別の事象を伝える場合には、ソレモは不適切である。よって、(10a–10b) のような並列的に事象が述べられる環境や、継続的に異なる事象が述べられる環境 (10c) では、ソレモは用いられない。この性質は、ソレモと似た振る舞いを見せるシカモ等の接続表現と差を示すものと指摘される (cf. 伊藤 2010:107–112)。

(10)　a.　彼女は美人で教養があって {# **それも** / しかも} 謙虚な人柄だ。　(飛田・浅田 1994:249)

　　b.　彼はレコードを買った。{# **それも** / しかも / そして / それに / それと} 映画も見た。

　　c.　彼はレコードを買った。{# **それも** / しかも (それは)} とても高かった。

事象の同一性の制約は、累加標識の解釈との比較で明らかである。(11a) は、先行節の事象「彼がレコードを買った」自体が更新される形で、発話全体では一つの事象「彼が『ペット・サウンズ』を買った」として解釈される。一方、(11b) からは、「彼がレコードを買った」という事象を構成する一つの下位事象として、例えば「『ラバー・ソウル』に加えて『ペット・サウンズ』を買った」といった解釈が得られる。両者の違いは、§ 3.3で議論する。

(11)　a.　彼はレコードを買った。**それも**『ペット・サウンズ』を (買った)。

　　b.　彼はレコードを買った。(何枚か買ったが、)『ペット・サウンズ』**も**買った。

3　談話構造的分析

上記の用法が持つソレモの性質を Question Under Discussion (QUD) の枠組みから談話構造的に分析する。

3.1　QUD 的分析

QUD は、談話構造の観点から、各主張には明示的・暗示的疑問が存在すると想定し、疑問の意味論を基に、焦点などの情報構造に関わる現象を分析するための形式意味論・語用論の枠組みである。QUD では、対比的主題 (Contrastive Topic) の現象 (e.g., Constant (2014) による中国語の *ne* の分析) など、談話構造と関わる表現が有効的に分析され、それらの標識から得られる解釈は、話者が答えようとする疑問、ひいては、話者が想定する談話構造に基づき説明される。理論の詳細は、Roberts (2012) を参照されたい。

ソレモに関連する議論としては、直前の主張に関する付加詞を標示するドイツ語の *und zwar* や、英語・ドイツ語の指定標識 *namely*/*nämlich* の分析において、QUD 的アプローチが取られている (Onea & Volodina 2011, AnderBois & Jacobson 2018, Tellings 2020)。他言語の関連する表現は、§ 4で扱う。

3.2　疑問における伴立

§ 2での 2 つの性質から、ソレモ容認のための条件 (12a)、ソレモから得られる意外性の読み (12b)、それぞれの用法のソレモ節の意味 (12c) を提案する。q は疑問、Ans(q) は疑問 q への答えである主張、$\leq_{\text{discourse}}$ は談話の先行性、$\vDash$ は伴立、CG は共通基盤 (Common Ground)、ALT(p) は命題 p の代替要素の集合、$<_{\text{likelihood}}$ は見込みの度合いを示す。Hamblin (1973) の疑問の意味論に基づき、疑問は、それが答えとなりうる命題の集合とする。

(12)　a.　$\text{Ans}(q) \leq_{\text{discourse}} \text{Ans}(q') \ \wedge \ q' \vDash \text{Ans}(q)$

　　b.　$\forall p[p \in \text{ALT}(\text{Ans}(q')) \wedge p \neq \text{Ans}(q') \rightarrow p >_{\text{likelihood}} \text{Ans}(q')]$

　　c.　$[\![\text{それも}_{\textbf{付加詞}}]\!]: \ \lambda P_{<s,t>}.\exists e.[e = \epsilon \wedge P(e)]$

　　$[\![\text{それも}_{\textbf{措定}}]\!]: \ \lambda P_{<e,t>}.\exists x.[x = a_i \wedge P(x)]$

　　$[\![\text{それも}_{\textbf{同定}}]\!]: \ \lambda y_{<e>}.\exists x.[x = a_i \wedge x = y]$

(ただし、ϵ と a_i は、それぞれ直前の主張で導入された CG にある事象と個体である。)

談話の先行性は、Ans$(q) \leq_{\text{discourse}}$ Ans(q') により、ソレモ節 (i.e., Ans(q')) が前述の主張 (i.e., Ans(q)) の直後に追随するか、挿入句的に与えられることを捉える。事象の同一性は、Onea & Volodina (2011) による指定標識

nämlich で標示された主張が答える疑問が前述の発話を伴立するという QUD での分析を援用し、$q' \vDash \mathrm{Ans}(q)$ により、ソレモ節が答える疑問 (i.e., q') が直前の主張 (i.e., $\mathrm{Ans}(q)$) を伴立することを示す[7]。ソレモから得られる意外性の読みは、ソレモ節の命題が、その代替要素である命題よりも見込みの度合いが低いということを規定する規約的含意に起因すると想定する。

具体的に、(1) の場合は、ソレモ節は直前の主張「彼がレコードを買った」を先行節として取り、それぞれ、「彼は {どこで / いつ / どのように / どれくらい} レコードを買ったか」という疑問に答えを与えている。これらの疑問を構成するどの命題も、直前の主張「彼がレコードを買った」を伴立するものである。

(1) 彼はレコードを買った。**それも** {早稲田で / 6 月に / 急ぎながら / 片手で持てないくらい}$_{\textbf{付加詞}}$(買った)。

また、(2b) では、モダリティ副詞や話者指向副詞がソレモ節と不適合であることを見た。ソレモ節で導入可能な付加詞は、(12c) の分析から、先行節の事象に関わる範疇 (i.e., 場所・時間や関連する主題役割など) のタイプ $< s, t >$ の付加詞に限定されている。(2b) のような文副詞は、命題自身あるいは発話行為 (speech act) を対象に作用するものであり、タイプのミスマッチによりソレモ節と不適合であると説明できる。

(2b) 彼はレコードを買った。**それも** {* 恐らく $_{\textbf{モダリティ副詞}}$ / * 幸運なことに $_{\textbf{話者指向副詞}}$}(買った)。

措定・同定については、タイプ $< e, t >$ の属性を問う「彼が買ったレコードはどのようなものか」、タイプ $< e >$ の指示対象を問う「彼が買ったレコードはどのレコードか」という疑問が想定される。

以下では、累加標識の意味との比較から議論し、(12) の提案から得られるソレモ認可の条件が適切な使用環境を予測することを見る。

3.3 累加標識との適合性

形態的に、ソレモは指示詞「それ」と累加標識「も」から構成されると想定できる。そうであれば、ソレモは累加の意味とどう関係するのだろうか。重要なことに、ソレモは累加表現と共起できない (13)。この事実について、QUD の観点から何が指摘できるかを議論する。

(13) a. 彼はレコードを買った。{# **それも** / それに / それと} ターンテーブル**も** $_{\textbf{累加}}$(買った)。

b. 彼は早稲田でレコードを買った。{# **それも** / それに / それと} 国分寺で**も** $_{\textbf{累加}}$(買った)。

累加標識は「前提的意味」を持つ。「太郎**も**来た」から得られる「太郎以外に来た人がいる」という読みである。これは、代替意味論では (14) のように分析される (cf. König 1991, Krifka 1999)。ただし、累加の「前提的意味」は他の前提トリガーのように前提調節ができないため (Kripke 2009)、(14) は適切な累加の意味を捉えられない。

(14) $\exists x[x \in \mathrm{ALT}(t) \wedge x \neq t \wedge \mathrm{COME}(x)]$

QUD では、累加標識は、談話構造として入れ子構造の疑問を持つ対比的主題で分析される (Beaver & Clark 2008)。「国分寺で**も**レコードを買った」という主張が真である場合には、その談話構造として、「どこでレコードを買ったか」という疑問があり、その疑問の下位疑問への答えとして「国分寺以外の場所でレコードを買った」という主張が、既に文脈的に共通基盤にあることが要求される。この分析では、累加の「前提的意味」は、談話で先行する姉妹関係の下位疑問が同じ極性で文脈的に答えられることから生じるとし、前提調節の問題には (14) よりも強い制約を掛けることができ、談話構造に依存的な累加標識の性質を捉えられる。

対比的主題の談話構造は、簡易的に**図 1**のように表される (cf. Büring 2003)。階層的な疑問同士の関係は、それぞれの疑問への答えにおける伴立関係を反映する。**図 1**では、下位疑問の「X でレコードを買ったか」に対するそれぞれの排他的な答えが、集合的に上位疑問の「彼はどこでレコードを買ったか」への答えを伴立する。

図 1のような累加標識が認可される環境では、それぞれの下位疑問への答えは、その事象の成立に関して互いに独立しており、主張同士の間には伴立関係は生じない。一方、(12) の分析では、ソレモ節が答える疑問は、直

[7]ただし、Onea & Volodina (2011) の分析では、直前の発話の伴立は、同定と措定においてそれぞれ適切性条件、前提とされている。本稿では、ソレモは用法を問わずに常に直前の主張を伴立するとし、用法の違いは、答える疑問の意味的タイプの違いで説明する。

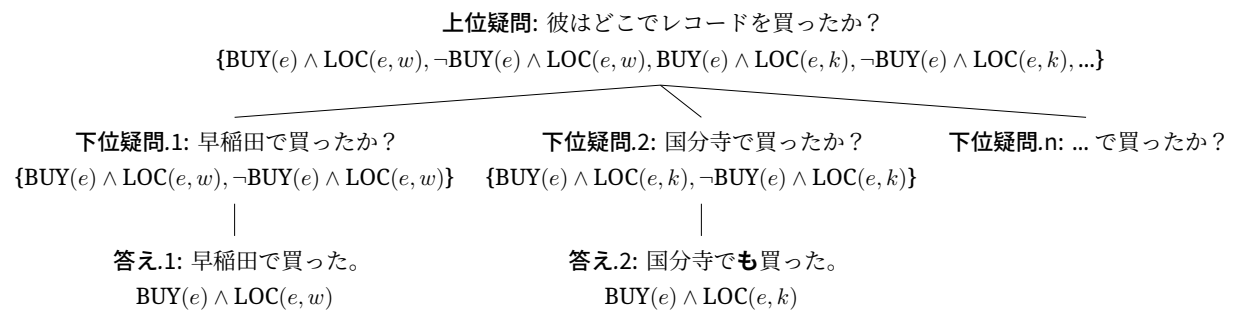

図 1: 累加標識の談話構造

前の主張を伴立する命題の集合であり、先行節との間に事象の同一性の制約がある。よって、ソレモ節と累加標識の不適合性は、両者が標示する主張が答える疑問、すなわち談話構造の違いとして説明できる。

さらに、事象の同一性に関して、等位接続詞を含む主張を考えたい[8]。(15) では、ソレモ節で「レコードを買う」行為が行われた複数の場所を示す付加詞が等位接続詞で繋がれている。全体の命題的意味は同様であっても、その情報の提示の仕方によって、(13b) と (15) ではソレモとソレニ・ソレトの容認判断が反転する。

(15) 彼はレコードを買った。{**それも** / # それに / # それと} 早稲田と国分寺で (# **も** $_{\text{累加}}$)(買った)。

この事実から、ソレモによって導入可能な要素は、対象の事象に関してその情報が不明瞭な範疇のものに限定されることがわかる[9]。(13b) では、直前の主張で場所の情報が既に与えられているため、ソレモ節で累加的に別の場所の情報を与えることができないが、(15) では、未だに不明瞭なため、新規に場所の情報を与えられる。

ソレモは、対比的主題と異なる談話構造を表示するため、累加標識と不適合だが、発話時点で明らかにされた情報に依存的にその認可が決まるという性質を持つ点では共通して談話構造に敏感な表現であると言える。

4 通言語的貢献

他言語における同様の表現との比較から、予想される諸課題に本研究がどのように貢献し得るかを見ていく。

4.1 ソレモの構成性: 付加詞導入と指示詞・接続詞・累加標識

日本語には、ソレデ・ダカラのように形態的に指示詞・コピュラ・助詞等の機能語的要素から成ると想定される一群の接続詞が認められ、その意味が構成的に得られるかは接続詞・指示詞研究の議論の一つとなっている (田村 2005, 竹内・岡﨑 2018)。ここでは、通言語的観点を踏まえ、ソレモに構成性を見出だせるかを考察したい。

本稿で議論したソレモの用法と同様に、直前の主張に追随的に情報を与える用法を持つ表現は、通言語的に観察される。興味深いことに、それらの表現はたいてい指示詞・等位接続詞・累加標識を含んでいる。Lødrup & Haff (2011) は、付加詞を導入するノルウェー語の *and that* 構文 (16) の統語的分析の議論の中で、同構文で現れる指示詞を、必ず言語的な先行詞を必要とする表層照応の代名詞と分析している[10]。

(16) *Han løp hjem,* ***og det*** *i full speed.*
he ran home and that at full speed
'He ran home, and that at full speed.' (Lødrup & Haff 2011:258)

加えて、ソレモと類似して、累加標識または累加標識と指示詞から成る表現が、直前の主張またはその主張で導入された名詞句に関する付加詞を導入する用法も通言語的に観察されることを指摘する (17)。

[8] 累加標識と等位接続詞の言い換えにより生じる意味の違いについては、Krifka (1999) の 'distinctiveness condition' の議論がある。

[9] 同様のアイディアは、Onea & Volodina (2011) でドイツ語の *und zwar* の分析で触れられている。

[10] 他言語でも同様の構文が認められる: 英語: *and that, at that*; ドイツ語: *und das, und zwar*; フランス語: *et cela, et ça* (cf. Lødrup & Haff 2011, Onea & Volodina 2011)。

(17) a. *It's a wonderful picture of light shining through trees - and by a child* ***too****!*[11] (英語)

b. *He went to India. (And)* ***that too*** *{alone / for a week / by train}.* (インド英語[12])

c. *corona virus kisī sətəh pər bʰī əstitvə mẽ rəh səkta hɛ ɔr* ***vo bʰī*** *kəī dinõ tək.*[13]
Corona Virus any surface on too existence in live be.able COP and that too some days until
「コロナウイルスはどのような表面でも存在することができる。**それも**数日の間。」 (ヒンディー語)

d. *u raft hendustān.* ***un=am*** *{tanhā / barāye yek hafte / bā qatār}.* (ペルシア語)
3SG went.3SG India that=too {alone / for a week / with train}
「彼はインドに行った。**それも** {一人で / 一週間 / 電車で}。」

§ 3.3で見たように、付加詞導入と累加の用法は QUD では互いに異なる性質を持つと分析され、直接的な関係性を見出すことは容易でない。しかしながら、より詳細な議論が必要なものの、これらの観察事実は、直前の主張を表層照応する指示詞と、等位接続詞・累加標識が共通して持つ何らかの談話的性質とが付加詞導入に関与することを示唆する。すなわち、ソレモの意味を「それ」と「も」の意味に還元できる可能性を示唆するものである。

4.2 指定標識

談話構造的にソレモと似た性質を持つ表現には、換言を示すスナワチ・ツマリや、*namely*/*nämlich* のような指定標識 (specificational markers) と呼ばれる表現がある (Onea & Volodina 2011, AnderBois & Jacobson 2018, Tellings 2020)。これらの標識は、直前の主張に追随し、その節あるいは節内の名詞句を先行詞とし情報を与える点でソレモと同様であるが、定名詞句を先行詞として取れる点で、相違的な性質を持つ (4), (18)。

(4) 彼は {この / その / あの / この店で一番高い} レコードを買った。
{# **それも** / すなわち / つまり} {60 年代の (レコード) を $_{\text{措定}}$ / 『ペット・サウンズ』を $_{\text{同定}}$}(買った)。

(18) *Fred scaled the tallest building in the world,* ***namely*** *Burj Khalifa.*
(AnderBois & Jacobson 2018:390)

また、ソレモとの重要な違いとして、換言・指定標識は付加詞導入には用いられない (19)。

(19) a. 彼はレコードを買った。{**それも** / # すなわち / # つまり} 早稲田で $_{\text{付加詞}}$(買った)。

b. *Juan celebrated his graduation,* {*but I don't know where* / ******namely*** *on the beach*}.
(AnderBois & Jacobson 2018:392)

これらの標識は、先行詞の定性と付加詞導入の用法の違いで分別でき、それぞれの用法について統一的に説明できる可能性がある。

4.3 同格表現

さらなる関連の表現として、英語において *that is* や *in other words* のような表現あるいはイントネーションで示される同格表現がある。先行研究は概して指定標識と同格の類似した性質を認めた上で、その違いとして、Onea & Volodina (2011:4–5) は、指定標識である *nämlich*/*und zwar* と異なり、同格は付加詞導入の用法がないことに加え、固有名詞を先行詞として取れることを指摘している (20)。

(20) a. **John,* ***namely*** *my best friend, went to a party last night.*

b. *John,* (***scilicet***) *my best friend, went to a party last night.* (Onea & Volodina 2011:5)

同格は規約的含意の意味を投射する典型的な事例として知られる。Potts (2005) は、at-issue の意味 (グライスの 'what is said' に当たる意味) と規約的含意の意味は、互いの真偽に依存しないことから、両者は互いに異なる次元にあると提唱している。

[11] https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/too (最終閲覧日: 2020 年 4 月 17 日)
[12] *that too* は、ヒンディー・ウルドゥー語の同様の表現 *vo bʰī* 'that too' の翻訳借用の可能性がある (私信: プラシャント・パルデシ教授)。
[13] https://www.bbc.com/hindi/science-51853125 (最終閲覧日: 2020 年 5 月 11 日)

§ 2.1では、ソレモと先行詞の間に先行性の制約があることを見たが、同様の制約は、指定表現でも同格表現でも見られるものである。上記の例で観察されるように、本稿で議論した標識の違いが、名詞句の定性や、普通名詞・固有名詞などの利用可能な先行詞の性質の違いに帰するならば、ソレモのような不定名詞句のみを先行詞に取る標識も含め、これらの標識は共通の原理で説明できる可能性がある。

また、ソレモからは意外性の読みが得られる。同様に意外性の読みを与える「さえ」や *even* などの焦点小辞は、伝統的に規約的含意と結び付けられてきた。規約的含意の研究では、累加標識を含め、これらの焦点小辞の意味が多次元的意味に関係することも示唆されている (Potts 2005:216–217)。ソレモの振る舞いがこれらの談話に敏感な標識とどのように関連するかは今後の研究課題である。

5 結論

本稿では、先行研究の乏しいソレモの性質を談話構造的側面から議論した。付加詞導入と措定・同定の用法は、談話の先行性と事象の同一性という制約を持つことを指摘し、QUD の枠組みからその認可の条件を分析し、ソレモ節の意味を提案した。通言語的観点からは、他言語で観察される追随的な疑問に答える標識の振る舞いから示唆される、構成的分析の可能性と、付加詞導入・先行名詞句の性質・同格表現の関連性を考察した。

本稿の分析は、形式意味論・語用論の枠組みである QUD で、接続詞ソレモを対象に談話構造的側面を中心に行ったものである。談話構造上の要因を考慮することで、接続詞の性質を効果的に分析できることを示した。

参考文献

AnderBois, Scott & Pauline Jacobson (2018) Answering implicit questions: The case of *namely*. In Katherine Blake Sireemas Maspong, Brynhildur Stefánsdóttir & Forrest Davis (eds.), *Proceedings of the 28th Semantics and Linguistic Theory*, 388–408.

Beaver, David I. & Brady Z. Clark (2008) *Sense and Sensitivity: How Focus Determines Meaning*. Oxford: Blackwell.

Büring, Daniel (2003) On D-trees, beans, and B-accents. *Linguistics and Philosophy* 26(5): 511–545.

Constant, Noah (2014) *Contrastive topic: Meanings and realizations*. Amherst, MA: University of Massachusetts dissertation.

Hamblin, Charles L. (1973) Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10(1): 41–53.

König, Ekkehard (1991) *The Meaning of Focus Particles: A Comparative Perspective*. London: Routledge.

Krifka, Manfred (1999) Additive particles under stress. In Devon Strolovitch & Aaron Lawson (eds.), *Proceedings of the 8th Semantics and Linguistic Theory*, 111–128.

Kripke, Saul A. (2009) Presupposition and anaphora: Remarks on the formulation of the projection problem. *Linguistic Inquiry* 40(3): 367–386.

Lødrup, Helge & Marianne Hobæk Haff (2011) Another overt surface anaphor: Norwegian 'and that'. In Chundra Cathcart, I-Hsuan Chen, Greg Finley, Shinae Kang, Clare S. Sandy & Elise Stickles (eds.), *Proceedings of the 37th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 257–271.

Mikkelsen, Line (2011) Copular clauses. In Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn & Paul Portner (eds.), *Semantics*, vol. 2, 1805–1829. Berlin: De Gruyter Mouton.

Onea, Edgar & Anna Volodina (2011) Between specification and explanation: About a German discourse particle. *International Review of Pragmatics* 3(1): 3–32.

Potts, Christopher (2005) *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.

Roberts, Craige (2012) Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics* 5(6): 1–69.

Tellings, Jos (2020) When *if* and *when* specify modals. Presented at WCCFL 38, `https://time-in-translation.hum.uu.nl/media/news/2020/03/09/tellings-wccfl38-screen-version.pdf`.

伊藤晃 (2010) 『談話と構文』 大学教育出版.

竹内史郎・岡﨑友子 (2018) 「日本語接続詞の捉え方: ソレデ, ソシテ, ソレガ, ソレヲ, ソコデについて」『国立国語研究所論集』 14: 241–254.

田村早苗 (2005) 「日本語接続詞の構成性/非構成性: ソシテ・ソレデ・ダカラについて」『京都大学言語学研究』 24: 85–115.

沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房.

松村明 編 (1997) 『大辞林（第 3 版）』 三省堂.

飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版.